

- 61 故人分食噉 故人 食を分けて噉はしめ
- 62 親族把衣溜 親族は衣を把とつて溜ふ
- 63 既慰生之苦 既に生の苦しみを慰む
- 64 何嫌死不邁 何ぞ嫌はん 死の邁やかならざることを
- 65 春壘由造化 春壘は造化に由る
- 66 付度委陶甄 付度は陶甄に委す
- 67 荏苒青陽盡 荏苒として青陽盡く
- 68 清和朱景妍 清和朱景妍なり
- 69 土風須漸漬 土風須く漸漬なり
- 70 習俗擬相沿 習俗相沿んと擬す

【八段】

この十句では、「七段」を受けて太宰府謫居の生活描写、とりわけ太宰の地の風俗を、徳化の及ばぬ無法地帯化している悲惨な様として、実風景を通して詠う。この句には、既に川口久雄氏や金原理氏に指摘があるように(注3)白居易が、「東南行二百韻」で、江州司馬に貶されその江南地方の風俗を描いている句内容の投影が強く窺える。

71 苦味鹽燒木 苦味の塩、木を焼き